



## 大きな国際会議と小さな国際ワークショップ

者

福田 隆\*

Attending an international conference or a small workshop

Key Words : Workshop, Conference, Proceedings, Registration Fee

### はじめに

今年の1月に、故Krumhansl教授の追悼記念講演会に参加するためにアメリカのロスアラモス国立研究所に行ってきました。講演会は1日でしたが、その後2日間小さなワークショップがあったのでそちらにも参加してきました。帰国後まもなく、若者の欄に原稿を書く話をいただいたので、このワークショップに参加したときに感じたことを少し書かせて頂くことにしました。

### 1. Krumhansl教授追悼記念講演会

Krumhansl教授は、1980年～1999年の間、米国ロスアラモス国立研究所のシニアフェローであったことより、同研究所主催の追悼記念講演会が開かれました。Krumhansl教授はかつてApplied Physics LetterやPhysical Review LetterのEditor、米国物理学会会長を歴任されていたこともあり御存知の方も多と思います。Krumhansl教授の研究分野は、情報システム、応用数学、凝縮系物質の理論、材料科学、非線形科学、分子生物学など多岐にわたっておりますが、特にShrieffer教授との共同研究で行われたソリトンに関する研究で有名です。講演会では、Walter Kohn教授、Sir Roger Elliot教授、Neal Lane教授、Lee Tanner博士など多くの著名な人が講演されました。この講演会は1日だけなの

で、これだけのためにわざわざ日本から行くのは気が進まなかったのですが、この講演会のあとに、非公式であるがPost Krumhansl Workshopを開くとの話があり、これがおもしろそうなので参加することにしました。

### 2. 小さなワークショップ

Post Krumhansl Workshopと題した非公式のワークショップは、マルテンサイト変態(固体における1次の無拡散型相変態)に関しての理論家であり追悼記念講演会の主催者の一人が企画したものでした。折角各地からマルテンサイト変態の研究者がロスアラモスに集まってきたのだから、この機会にワークショップを行いたいと持ち出したことにより実現しました。一人当たり1時間の持ち時間で、2日間にわたりマルテンサイト変態について、参加者が話題を持ち出して議論を行いました。持ち時間の半分以上が議論という、大きな国際会議ではなかなか味わえない雰囲気味わうことができました。時間が長ければ良い議論ができるとは限りませんが、興味ある内容の場合は、1時間でも短く感じます。

実は、このワークショップの参加者のうち、主催者と著者も含めて5人は約1年前に、スペインのベナスケという小さな町で行われたワークショップに参加しており、そのときにも同じような印象を感じました。ベナスケは、ピレネー山脈の麓にある小さな町ですが、ここに、バルセロナ工科大学のセミナーハウスがあります。大自然に囲まれた不便なところにあるという意味では阪大の蒜山セミナーハウスに似ている気がします。参加者は、バルセロナ工科大学からバスで約5時間かけてベナスケまで移動し、60人ほど収容のセミナーハウスで朝早くから夜遅くまで、ひとり40分の持ち時間で討論するというものでした。このときのワークショップが良かったこと



\* Takashi FUKUDA  
1964年3月生  
1988年大阪大学・大学院工学研究科・  
金属材料工学専攻修了  
現在、大阪大学・大学院工学研究科、  
講師、博士(工学)、材料物性  
TEL 06-6879-7483  
FAX 06-6879-7522  
E-Mail fukuda@mat.eng.osaka-  
u.ac.jp

が、ロスアラモスで行われた非公式ワークショップに参加するモチベーションになったように思います。小さなワークショップの良いところは、主題がかなり明確になっており、その主題について集中的に討論できるところにあると思います。

### 3. 大きな国際会議

小さなワークショップでは、良くてアブストラクトが配布される程度であり、プロシーディングは普通出ますが、大きな国際会議では、プロシーディングスが出るのが普通だと思います。プロシーディングスの質は会議によりばらばらの気がしますが、中には相当有名なJournalの連続巻番号のひとつになるものもあり、非常に魅力的です。ただし、Journalが著名になるほどリジェクトされる確立も高くなる気がします。大きな国際会議の魅力のひとつは、講演数が多く、多岐にわたった研究情報を短期間で得ることにあると思います。また、聴衆も多いので自分の研究をアピールするにも効率的だと思います。ところが、大きな国際会議は、その主催者がどのような会議構成をするかにより随分と会議に対する印象が変わります。

これまでの経験でよかったと思う発表形式につきのようなものがあります。20分程度の招待講演以外はすべてポスター発表。招待講演は大きな会場で行い、その間に他の講演は一切無し。招待講演の直ぐあとに、一人3分のポスタープレビューを行い、それに対する質問は一切無し。質問は、それぞれポスターの前に行って行く。また、ポスターの後に総合討論会があり意見を交わすというものでした。プレビューのときに、どのポスターが面白そうかチェックできるし、また、3分あれば自分の研究のアピールも十分でき、500人程度のあまり大きくない国際会議では良い発表形式に思います。

### 4. 国際会議と交通アクセス

大きな国際会議は、交通のアクセスが良く、観光地としても有名などで行われることが多いように思います。これは、多くの参加者が滞在できるホテルを確保する必要があること、参加者が容易に到達できること、外国から時間をかけてでもとても参加したくなる気分させる必要があることなどの理由からそのようにしているのだと思います。これに

対して小さなワークショップは参加者が少ないため交通の便など考える必要がありません。たとえば、ロスアラモス国立研究所はその生い立ちが原爆の極秘開発ということからもわかるように、非常に辺鄙なところであり、公共の交通機関だけでは辿り着くことができません。レンタカーを借りるか、知り合いに頼んで乗せていってもらわなければならないようです。スペインのベナスケも非常に不便であり国際空港のあるバルセロナから1日2本しかバスがありません。このような小さなワークショップが交通のアクセスの非常に悪い田舎で行われると、車を持たないものは、もはや周りを見て回ることがほとんどできません。

一方、通常大きな国際会議はホテルが多く立ち並ぶ都市部の交通アクセスの良いところか、完全なりゾート地で行われることが多いように思います。空港から1時間程度の場所で行われることが多いように思います。会議終わった後には、市内観光をしたり、その土地の美味しいものを食べさせてくれるレストランに入ったりすることができるのが、都市部やリゾート地で行われる国際会議に参加する際の楽しみの一つでもあります。会議の会場とホテルの往復だけをしていると、「大学の先生たるものは、いろいろな教養を兼ね備えてなければならないから、国際会議の際には専門だけでなく、その土地を訪れないと分からない知見を得るために、町の様子を見て回らないとだめだよ」などと先輩の先生に叱られたりしました。ところで、国際会議の中にはオフィシャルエクスカージョンがあり、プログラムの中にちゃんと観光の時間が確保されてある国際会議もありますが、余りにも観光などにお金を使いすぎて、予算不足になった国際会議もあると聞いたことがあります。

### 5. 参加費

大きな国際会議の参加費は大抵高すぎるように感じます。国内の学会の参加費がアブストラクトも含めて大抵1万円ですむのに対して、国際会議では5万円、6万円は普通で、中には8万円ほどするものもあります。プロシーディングスとバンケット、レセプションパーティーを差し引いて考えてもやはり高すぎるような気がします。先に紹介した小さなワークショップでは、参加費は無料あるいはあったとし

でも、非常に小額です。大きな国際会議の参加費が一体なぜこれほどまでに高くなるのか分かりませんが、無駄なものが多すぎるような気がします。特に無駄とを感じるのは、多くの国際会議で配られる鞆と筆記具一式です。格安航空券を使うと、場所によっては渡航費を国内並に安く済ませることができるため、国際会議の参加費の高さが目立ちます。

## 6. おわりに

あまり多くの国際会議に参加したわけではありませんが、幾つかの会議やワークショップに参加して

感じたことを書かせていただきました。国内、海外問わず学会の講演会に参加すると、いろんなところに出かけることができ、これが大学で研究していることの特典のひとつのようにも感じます。今年の春は、花粉症の人にとっては、例年以上につらかったと思います。私も、花粉症になやまされているもののひとりです。花粉の飛ぶ時期は、ほんとうに、花粉の無い海外に逃げたいと思います。不思議なことに、この花粉の時期には私の関連する国際会議はありません。

